

虫の生命

夢野久作

青空文庫

炭焼きの勘太郎は妻も子も無いひとりもの独身者で、毎日毎日奥山で炭焼竈がまの前に立って煙の立つのを眺めては、淋しいなあと思っております。

今年も勘太郎は炭焼竈に櫓の木や檜の木を一パイ詰めて、火を点けるばかりにして正月を迎えましたが、丁度二日の朝の初夢に不思議な夢を見ました。

勘太郎は睡っているうちに、どこからともなく悲しい小さい声で歌う唱い声が聞こえて来ました。

街には人の冬ごもり

明るい楽しい美しい

樹々には虫の冬ごもり
暗い悲しいたよりない

冬の夜すがら鳴る風や
降る雪霜のしみじみと

たよりに思う櫛の樹は
伐りたおされて枯らされて
炭焼竈に入れられて

明日は深山に立つけぶり

その櫛の樹ともろ共に

灰か煙りかかた炭か

あとかたもなく消えて行く

悲しい悲しいそのいのち

たれがあわれと思おうか

小さい小さい虫一つ

たれがあわれと思おうか

このうたがだんだん耳に近くに聞こえて来ましたから、勘太郎はフツと眼を開いて見ましたら、真暗な中に美しいお姫様が一人突立って、奇麗な両袖を顔に当て、さめざめと泣いている姿がありありと見えました。

勘太郎は驚いてはね起きますと、これは夢で、もう夜が明けていて、表には一パイ雪が降り積っているのが見えました。

勘太郎は寝過ぎたと思つて、急いで竈の前に行つて火を入れようとしたが、どうしても昨夜の夢が気になつてたまりません。カマドの中には檜の樹も沢山に入れてあるのですから、その中には虫が一匹もいないという事はありません。又檜の樹に限らず他の樹にも虫が住んでいない筈はありませんから、どちらにしても虫共が今日その住居すまいごと焼き殺される事を知つたら、きつと悲しがるに違いありません。

「ちいさいちいさい虫一つ

たれが憐あわれと思おうか」

という夢の中の歌が、雪に包まれた竈の中から勘太郎の耳に聞こえて来るように思われました。

勘太郎は思い切つて、折角築いた竈を打ち破わりました。そうして一本一本積んだ樹を取り出して、隅から隅まで調べはじめましたが、不思議な事には、今度積み込んだ樹に限つて一本も虫穴の明あいたがありません。

勘太郎は馬鹿馬鹿しい事をしたと思ひました。これを焼かなければ御飯を食べる事が出来ないのに、つまらない夢なんぞを本当にして残念なことをしたと思ひました。

そのうちにだんだん調べて来て、一番おしまい一本の丸太が残りました。

それは大きな檜の丸太で、その幹の真中あたりに小さな虫穴が一つやつと見付かりました。

勘太郎は、扱さてはこれが昨夜の虫の住居すまいかと思いましたが、中を覗いても何も知れませんが、又斧で割ったり何かして、中にいる虫まで殺すような事があつては、折角助けた甲斐がありません。勘太郎は仕方なしにお弁当を作つて、この檜の丸太を荷にないて、山奥の山奥のその又山奥のとても人間の来そうにもない処ところに行つて、只とある岩の間へそつと立てかけて置きました。その中うちには春が来て、虫がはい出して、蝶か何かになつて飛びまわる事が出来るだろうと思つたからです。

虫の方は助ける事が出来ましたが、勘太郎はもう炭焼きなんぞ

はする気になりませんでした。しかし生れて炭焼きしかした事のない勘太郎は他の仕事を一つも知りませんでした。何をしようかといういろ考えて帰るうちに道を見失つて、だんだん山深く迷い入つてしまいました。

行つても行つても山ばかりで、食べ物も何もありません。日が暮れ夜が明けても同じ事です。しまいには飢え凍えて死にそうになりましたから、勘太郎は草の根を掘つて食べたり、枯れ葉を綴つて身体からだに着たりして、仙人のようになつて、自分の家うちの在る方へと山又山を越えて行きました。

雪に降られ雨風に打たれて、木の皮や草の根を食べながら行く苦しきはたとえようもありません。これというのも、たった虫一

匹の生命いのちを助けたため、その虫を助けたのは初夢を本当にしたためと思えば、勘太郎は口惜くやしいやら情ないやら涙をポロポロコボして行きました。

その中うちに春が来たらしく、雪も降らず風もあたたかくなって、勘太郎が行く山道を横切る雪も白くふわふわとして来ました。あたたかい太陽の下の木々には芽が萌もえ出し、楽しい鳥の音が方々から聞こえるようになりました。

しかし勘太郎はもうすっかり飢え疲れて、眼が見えなくなってきました。あっちへ行つては石に引つかかり、こっちへよろけては樹にぶつつかり、ヒヨロヒヨロして行くうちに、とうとうどこだかわからぬ処でバツタリ行きたおれてしまいました。

小さな虫を救うても

救うた生命いのちは只一つ

象の生命いのちを助けても

助けた生命いのちは只一つ

虫でも象でも救われた

その有り難さは変らない

虫でも象でも同様に

助けた心の美しさ

人の生命いのちを助くるは

人の心を持った人

虫の生命いのちを助くるは

神の心を持った人

みんな仕えよ神様に

御礼申せよ神様に

こんな歌がどこからともなく晴れやかに聞こえて来ましたので、勘太郎は不思議に思つて眼を開きますと、自分はいつの間にか見事な寝台ねだいの上に寝かされて、傍かたわらには大勢の美しい天女が寄つてたかつて介抱してあります。勘太郎は又夢を見ているなど思つて眼を閉じようとしみますと、不図自分の枕元にこの間夢で見たお姫様が

ニツコリ笑つて立つているのに気が付きました。

勘太郎は驚いてはね起きますと、どうでしょう。自分はいつの間にか髪から髯まで真白になって、神様のような白い大きな着物を着ています。それと一所に気持ちまでも神々しく清らかになつて、今までの苦しかった事も悲しかった事もすっかり忘れてしまいました。

「そら、神様のお眼ざめだ」

と大勢の天女たちは皆一時にひれ伏しました。

勘太郎はそのまま神様の気持ちになつてそこに止とどまりました。

もう何も食べる事も心配する事ありません。只毎日天女たちの春の歌を聞き、面白い春の舞を見ているばかりでした。

或る日、勘太郎は大勢の天女たちと一所に住居すまいを飛出しました。門口を出てからふり返つて見ると、自分達の住居すまいはこの間山奥の岩の間に立てかけた檜の丸太の中程にある小さな小さな虫の穴でした。

勘太郎は何より先に自分の昔の住家の処に来て見ました。見るとそこには昔の通りに自分の家があつて、前にはこれも昔の通りに炭焼竈があります。オヤ、今度は誰が炭を焼いているのだろうと思つて見ていますと、間もなく家の中から出て来たものは昔の勘太郎そっくりの男で、着物までも同じ事です。その男は神様の勘太郎の姿を見てこう云いました。

「ああ、蝶が沢山飛んで来たな。今年の正月、あの夢を本当にし

てあの檜の木の虫を助けておりやあ、今頃はあんな蝶になつて飛びまわっているかも知れない。その代りおれの方は日干しになつて死んでいるだろう。馬鹿馬鹿しい事だ。こつちの生命いのちと虫の生いのち命と換えられるもんか。どれ一つ炭を焼き初めようか。今度のは特別に虫の穴が多かつたようだぞ」

と云いながら炭焼竈に火を入れましたので、やがて煙が濛々もうもうと大空に向つて湧き出しました。

神様の勘太郎はまだ夢を見ているのか、それとも本当の事なのかさっぱり訳がわからなくなりました。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年5月22日第1刷発行

※底本の解題によれば、初出時の署名は「海若藍平《かいじやくらんぺい》」です。

入力：柴田卓治

校正：もりみつじゅんじ

2000年1月31日公開

2006年5月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

虫の生命

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>